

A 1 1

飛べないアゲハが卵を産んだ！！

○阿野 千里（帝塚山学院小学校）

1. はじめに

3年生の子ども達は、アゲハが大好き。毎日、毎日、観察して、幼虫になったら大騒ぎ！脱皮をしても大騒ぎ！さなぎになっても大騒ぎ！

そして、そして成虫になったら、もうそれはそれは大変です。

手乗りアゲハで校内中を自慢げに闊歩したり、ブローチみたいに制服にとまらせて歩いたり。

さあ、いよいよアゲハが空に飛び立つ世紀の瞬間！！

その瞬間は、クラスみんなでお祝いします。

そうです、それは、よく見る光景。

今日は、羽が折れて飛べなくなってしまったアゲハの物語をお話ししましょう。

2. 先生、助けて・・・

通学途中に羽の折れたアゲハを見つけた愛ちゃん。

「先生、助けてあげて・・・。」と私の所に持ってきました。

「何日生きるか分からないけど、砂糖水で10日は生きれると聞いているから、育ててみようか・・・。」と私。

村上先生から頂いたアゲハ草で、幼虫を育てていた飼育ケースに羽の折れたアゲハも入れて、一緒に育てる事にしましたのです。あいにく空いている飼育ケースがなかったのです仕方なく一緒に・・・。

それから、一週間程して、アゲハ草のアゲハが羽化しました。村上先生は、成虫も飼育出来ると強調されていたので、しばらく、成虫も一緒に砂糖水で育ててあげる事にしましたのです。

それから3日。

元気なアゲハはかわいそうだからと、やはり空に飛ばすことに決まりました。みんなで、お祝いして、空に飛んでいくアゲハを見守りました。

「アゲハの恩返しがあるといいな。」

さて、それから毎日、愛ちゃんは傷ついたアゲハに砂糖水を与え続けました。

私は、飼育ケースの中の枯れてしまったアゲハ草を捨てなければと思いながらも、そのまま忘れて放置してしまっていました。

それから5日程たって、愛ちゃんが、

「先生、もう駄目みたい。アゲハが動かなくな

った。あんまり砂糖水も飲んでくれない。」と、言いに来ました。

「そう、でも、15日も生きたから、きっとギネスにのるよ。本田先生でも最高記録は、10日だとおっしゃっていたもの。」

と、私は、彼女をなぐさめました。

次の休み時間、3年生の子ども達が大騒ぎで私のところにやってきました。

「先生、卵！卵！卵を産んでる。」

と異常な興奮状態です。なにが起こったのかと思って、すぐに飼育ケースにかけよると・・・。

なんと傷ついたアゲハが、枯れてしまったアゲハ草に、最後の力をふりしぼって卵を産んでいるではありませんか。

信じられない光景でした。夢なのかと思いました。もしも私が、砂糖水で育てられると知らなかったら、そのまま、すぐに息絶えていた命だったはずなのです。

残念な事に次の日アゲハは死んでしまいました。けれど、新しい生命をちゃんと私たちに残してくれたのです。

感動的な出来事でした。愛ちゃんは、アゲハを私と一緒に埋めに行きました。泣くかな？と思いましたが、お墓に手を合わせて愛ちゃんは、「ありがとう。アゲハちゃん。」と言いました。

3. まとめ

生命の神秘を感じました。新しい生命を誕生させるまで、きっとアゲハは、頑張って生きたんだと思うのです。

人間もアゲハも同じなんだと思いました。ただひたすら、一生懸命に生きている小さな生き物から、私達人間がハッと気づかされる事はたくさんあります。

今の日本の子ども達は、「命の尊さ」を毎日の体験から本当に学んでいるのでしょうか。今のお母さんたちは、ちゃんと子どもに命の素晴らしさを肌で伝えているのでしょうか。愛を育むのも、生きている喜びを感じるのも10歳までだと私は思います。

そういう意味で、小学校の理科教育での生き物教材の担う役割はとても大きいと考えます。